

本誌では 1993 年 9 月に、今回と同様のタイトルで、脳卒中をはじめとする代表的な疾患に関しての疫学の特集が組まれています。既にその時より 10 年に及ぶ歳月が経過しており、改めて最近のデータをもとに各種疾患の疫学についてリハビリテーション関係者が知っておく必要があると考え、本特集を企画した次第です。今回は脳卒中、脳性麻痺（前は奇形および発達障害）、脊髄損傷、関節リウマチ、切断という前回と同じテーマに加え、最近のトピックスである脳外傷についても取り上げてみました。

■**脳卒中** 本邦におけるリハビリテーション医療の対象疾患としてもっとも頻度の高い脳卒中は、現在約 147 万人が医療の対象と推定され、医療費の負担も大きい。このような脳卒中に関して、死亡率、死亡者数の変遷などの現状が紹介されると共に、有名な久山町での研究における追跡調査の結果が概説されている。さらに、高血圧、代謝異常、糖尿病という脳卒中の危険因子の最近の変化についても触れられている。（正門由久氏，7 頁）

■**脳外傷** 米国における脳外傷監視システム，TBI model system data base などが紹介されているが、残念ながらわが国においては大規模な疫学的調査は施行されていない。本邦の脳外傷に対する疫学研究として、地域単位で行った脳外科の立場からの調査、共通のデータベース作成を目的としたリハビリテーション科の立場からの研究が紹介されているが、この分野に関しては今後の研究の展開が待たれるところである。（大橋正洋氏，13 頁）

■**脳性麻痺** 脳性麻痺に関する疫学的研究の意義が言及された後、わが国と諸外国における発生率、有病率の推移が報告されている。特に最近の超低出生体重児における脳性麻痺の発生率に関して考察が加えられている。さらに本論文では、画像診断の進歩により脳性麻痺の成因がハッキリしてきたこと、機能障害の程度に変化がみられてきていること、疫学研究には国際的協力が必要なこと、などが述べられている。（北原 信氏ら，19 頁）

■**脊髄損傷** 全国労災病院リハビリテーション科が運営している脊髄損傷データベースに基づいた分析から、脊髄損傷の発生率と受傷原因の他、受傷者の年齢、性別、職業、学歴などについて、詳しく言及されている。さらに損傷程度、麻痺の高位などに関しても詳細に分析されているが、損傷高位として頸髄中央部に多いのが目立つ。また、合併症、職業復帰などの問題にも触れられている。（真柄 彰氏ら，29 頁）

■**関節リウマチ** 関節リウマチの本邦での有病率は約 0.3% で、全国的には約 50 万人の患者がいると推測される。本論文では、日常生活動作に関して、日本リウマチ友の会によるリウマチ白書をもとにその実態が述べられているが、さらに著者自身によるリウマチ患者の 10 年間に及ぶ ADL の変化に関する研究結果についても言及されている。リウマチ患者への早期からのリハビリテーションの介入の必要性が強調されている。（椎野泰明氏，35 頁）

■**切 断** 本邦における下肢切断の原因としては、欧米のように糖尿病性壊疽や閉塞性動脈硬化症などの血管原性疾患が増えている。このような背景のなかで、著者らが 28 年間に及ぶ臨床のなかで経験した 225 例の下肢切断、64 例の upper limb 切断について、その疫学的分析結果が報告されている。特に高齢者の血管性下肢切断が多く、ADL、QOL への配慮の必要性が指摘されている。（豊永敏宏氏ら，40 頁）